映画「学校をつくろう」公開記念座談会

# チームで、連携で、日本の教育を変える、日本の未来を変える。

（左から）

**甘竹秀雄**校友会長
㈱アマタケ相談役、関東学生卓球連盟会長。

**近衛はな**さん
女優、脚本家。
脚本にNHK『白洲次郎』など。

**日髙義博**理事長・学長
専修大学法科大学院教授・法学博士。

**神山征二郎**（こうやま）監督
映画監督。
代表作は『ハチ公物語』『ふるさと』など。

**菅沼堅吾**育友会長
東京新聞編集局次長。

**遡ること130年前、４人の創立者たちのチームは、「志」「思い」「情熱」を込めて「学校」をつくった。彼らが蒔いた種は、時を経て大きく成長した。そして、書籍となり、映画となった。専修大学・育友会・校友会が連携して誕生した映画「学校をつくろう」は、日本の教育を、明日を変える原動力となると期待されている。公開を間近に控え関係者に映画や大学、教育について語り合っていただいた。** 司会■『アドニス』編集部

## 映画が生まれるまでのストーリー。

**編集部■** 日本の大学は少子化、グローバル間競争という厳しい状況にあります。そうした中で、映画『学校をつくろう』の製作・公開の「意義」や「思い」について、日髙理事長・学長のお考えをお聞かせください。

**日髙理事長・学長●** 専修大学創立130年の式典を、2009年に行いました。その際、あらためて本学の歴史を紐解くにあたり、「専修大学の歴史と伝統」を語ることが在校生にとって、また、われわれにも必要であると感じました。そうした中、育友会の菅沼会長が中心となって志茂田景樹先生の小説『蒼翼の獅子たち』を出版され、それに触発されて校友会の甘竹会長から、「次は校友会の出番だ。この小説を映画にしたい」というお話がありました。

もう一つ、これは単に、専修大学の歴史だけの問題ではない。道徳教育や倫理教育、学校教育そのものが揺らいでいる現在、「教育の原点」が描けるのではないか。これからの教育のお手本になるのではないか。一般の人たちもこの映画を見たら、元気や勇気が湧いてくるのではないかと想像しました。『学校をつくろう』が完成し、神山監督の力量によって、さらに大きく仕上げられ感動しました。

**編集部■** 原作が映画化されるまでの経緯については、甘竹校友会長からお願いします。

**甘竹校友会長●** 校友会では『蒼翼の獅子たち』を、校友会員に折にふれ、販売してきました。この原作を読んだとき、専修大学の創立は凄いと思いました。私は卓球をやりたくて本学に入ったので（笑）、創立や創立者たちについてこの本を読むまで全然、知りませんでした。「本だけではだめだ。なんとか映画にならないか……」。校友二人に相談し、あるプロデューサーをご紹介いただいて本を見せたら、「これは、凄い映画になるぞ！」と言われました。

映画化にはかなりの予算が必要ですし、日髙理事長・学長に決断を仰ぎましたが、友人とは「実現は五分五分か」と話していました。プロデューサーからは、神山監督を起用したいという提案がありました。日髙理事長・学長には二、三度お願いしただけで、「よし、やろう！」。決断は、早かったですよ（笑）。そこで、万歳三唱（笑）。

**日髙理事長・学長●** 理事会も、みんな賛成でした。私が決断した一番の理由は、直感的に「面白い映画になるな」と感じたからです。それと、一般の方がご覧になっても面白いんじゃないか。社会貢献にもなる。

**神山監督●** この映画を見て「龍馬だけじゃないぞ、明治維新は」、そう思ってもらえれば。

**編集部■** 菅沼育友会長からは、原作ができるまでについてお願いします。

**菅沼育友会長●** 映画の原作として使っていただき、大変深く感謝しております、光栄です。この本自体は、育友会の50周年記念として、何か事業をしようという議論から始まりました。2007年頃で、私の息子が本学の２年次でした。われわれ親としても世間に誇りたい、知らせたいのは「専大が凄い学校だ」。創立者の物語は、恰好の分かりやすいアピール材料でした。育友会も反対はまったくなく、幹事会や総会で快く承認していただいて、本ができました。それは、創立者４人に魅力があり、何としても世の中に知らしめたいという気持ちがあったからだと思います。若い４人はカッコイイですし、非常に男前で知的です。

志茂田先生は、「明治維新が『武力』における明治維新ならば、４人の創立者がやったことは『知』の明治維新だ」「武力じゃなくて知識で維新、新しく日本を変えた」という思いで本を書きたいとおっしゃいました。まさに「社会知性の開発」という、専大の現代とも見事にマッチングしており、さすが「本質」を突くと感銘を受けました。

そういう流れを甘竹校友会長が受け止め、大学で大きく発展させていただき、ワクワクして上映を待っているところです。

## キャスティングの裏話、登場人物の魅力。

**編集部■** 大学側の「思い」を受けて映画化されたわけですが、神山監督は最近、学校を扱った映画が続いていますね。

**神山監督●** 『北辰斜（ほくしんななめ）にさすところ』（2007年）、『ラストゲーム・最後の早慶戦』（2008年）に続いて三連続です（笑）。主役のキャスティングについては、将来性のあるいい若手俳優を選びました。お互いライバル意識も出て、「負けるものか！」という感じでした。

それと、旧藩士でも上級にいた若い子弟ですから、人品や雰囲気が出せる人ということで、役者二世を多数、起用しています。ただ、二世だからいい、いうことではありません。私も過去に失敗した経験が、二、三度あります（笑）。また、親は俳優さんではありませんが、池上リョヲマは僕の秘蔵っ子ですので注目してください。

**編集部■** キャスティングがうまくいくと、その映画は成功したようなものだと聞きますが。

**神山監督●** 一にシナリオ、二に役者って言います。良いシナリオができて、良いキャスティングができたら、まず成功間違いないですね。講演に行くと、僕はこう言います。「皆さん、映画を見て眠くなることあるでしょ。あれは皆さんの体調が悪いんじゃありません。シナリオが悪いんです（笑）」。

**編集部■** ４人の創立者については、どうお感じになりましたか。

**神山監督●** どの創立者にも、共感しました。中でも相馬先生は戊辰戦争で兵隊に行き、野っぱらで切り合いをして人を殺しました。それが死ぬまで尾を引いた、と日記に書いてあります。映画で戊辰戦争はワンシーン、30秒ほどですが、そのワンシーンで明治維新という時代の全体像を感じとってもらえるような、映画のつくりをしました。

そういう時代をくぐり抜けて海外へ飛び出し、広い世界を見た人間たちの

### あらすじ

明治維新の動乱期、戊辰戦争で幕府側と新政府側に分かれて戦った、４人の若きサムライたちがいた。戦後、彼らは命懸けで海を渡り、アメリカで学び、帰国後、法律と経済を日本語で教える日本初の学校（現在の専修大学の前身）をつくった。初代校長の相馬永胤。日本最初の法学博士、田尻稲次郎。幼い頃から神童と謳われた目賀田種太郎。経済学を学んだ駒井重格。彼らは異国の地で出会い、友情を育み、武力ではなく学問の力で日本を変えようとした。

**東京・有楽町スバル座ほかにて2月19日㈯より公開予定！**

## 映画「学校をつくろう」公開記念座談会

責任として、目的意識を持って学んだ学問や世界観を日本の若い人に伝えようという気持ちが、学校づくりになったと思います。

だから、この映画を一番見てもらいたいのは、若い人たちです。いい成績を残し、いい学校に行き、いい会社に入るのも一つの目的ですが、それだけではないことを感じてもらいたいと思います。ただ、この映画は、大きく分類すれば「青春ドラマ」であり、「青春グラフィティ」です。そうした魅力もあります。

**編集部■**近衛はなさんは相馬先生の奥様である、陸（りく）さんをどのように演じたのでしょうか。

**近衛はな●**陸さんは東京女子師範学校、今のお茶の水女子大学の第一期生として卒業されました。当時、女性で学問をする人は、本当に稀ですよね。どういう「思い」で学問の道に行ったのか。また、どうして相馬さんの妻になったのか、考えました。

創立者の４人についてですが、最初に脚本を読ませていただいた印象は、なんてカッコイイんだろう。一人の女性として、相馬さんって素敵な人だなと思いました。先ほど監督が「目的意識」とおっしゃいましたが、何か物凄いものを目指している感じがしますね。

映画の原作
『蒼翼の獅子たち』
直木賞作家
志茂田景樹著
河出書房新社
1,680円（税込）

私も大学を卒業しましたが、自分自身、学問に対してどれだけの「思い」でやってきたか、反省もしました。この映画を見ると、一日一日の濃度が違ってくると思います。

**菅沼育友会長●**激動期の日本で、若者が立ち上がらなければ日本は終わってしまう。まさに、一人ひとりが龍馬ですよ。強い「志」を持って無謀と思えることにチャレンジし、偉いことに得た学問や知恵を日本に持って帰る。まさに「報恩奉仕」です。私はジャーナリズムの世界にいて、いまの日本から志が失われつつあると、ずっと思っていたので、感動でした。

しかも、突出したリーダーひとりではなく、仲間がワイワイやりながら一つの目標に向かっていく……。そこには、「友情」「絆」があり、これもいまの日本で失われていて、創立者を本にしたいという非常に大きな動機となりましたね。

**甘竹校友会長●**菅沼育友会長のお話の「チーム」についてですが、４人の創立者たちが共同でやる、これはスポーツの世界でも同じです。チャンピオンをつくるときも、必ずトレーナーやコーチがいます。この４人の創立者チームが本学の前身である専修学校をつくり上げ、大学の基礎をつくったということは、映画が公開されると大きな話題になると思います。

### この映画の見所、アピールポイント。

**編集部■**次に、この映画の見所をご紹介ください。

**日高理事長・学長●**シナリオを拝見して、本学や４人の創立者関係の資料を、よく読み込まれているのにびっくりしました。資料は半端な量ではないですからね。しかも、読み込むだけではなくセールスポイントというか、映画をつくる上で注目すべきところをピックアップして、物凄くうまくシナリオに昇華されています。私も本学の資料をよく読んでいますが、「えっ、ここまで読み込んでいるの!?」という箇所が、かなりありました。

**菅沼育友会長●**私はこの映画を見て、改めて「専修大学は凄い！」ことを、まず学生に分かってほしいと思います。「青春グラフィティ」という側面もあるので、とっつきやすいと思います。私は音楽が入ってない段階で試写を見ましたが、それでも感動しました。ちなみに私もエキストラとして、冒頭シーンに出ています。

**神山監督●**大正13年の田尻先生と相馬先生の、合同追悼式のシーンですね。

**菅沼育友会長●**山本圭さんが目賀田先生役で「国の行く末を憂いて自分たちは頑張った。その『志』を若い人よ継いでくれ」と演説します。専修大学の関係者は、あそこでまずウルっとするんじゃないですか。

**編集部■**教職員や学生も、エキストラとして参加したそうですね。

**菅沼育友会長●**普通、こんな体験できませんね。エキストラの僕らにもメイクアップの人、服装を整える人、セッティングする人がいて、物凄い大勢のスタッフがいることに、びっくりしました。メイクアップすることに、学生は「エェー!?」でした。みんな「映画というのは凄いな」「ここまで手間をかけてやるのか」と、それはそれは感動してましたね。「映画の力」に期待したいと思います。

**編集部■**次に甘竹校友会長は、いかがですか。

**甘竹校友会長●**私はまだ試写を見てなくて、約10分に短縮されたものは見ました。残念だったのは、ぜひエキストラで出演しようと思っていたんですが。岩手に住んでるもので日程が合わず。主役まではできないけど（笑）。

見所についてですが、まず『学校をつくろう』という題名がいいと思います。いま、日本の中学校でも高校でも荒れてる中で、この『学校をつくろう』という題名で相当盛り上がるような気がしますし、人気を集めると思います。映画館のスバル座での上映以外でも、校友会は全国に319の支部組織がありますので、その内の150くらいを活用し、市民会館などで上映活動をやりたいと思っています。2011年度、12年度の２年間かけて、全国展開したいと思っています。

**菅沼育友会長●**われわれ育友会も、ご一緒に。

**甘竹校友会長●**もちろんです（笑）。大学も含めて三位一体です。

**日高理事長・学長●**私が注目するのは一番、最初のシーンですね。私が論文を書くときも同様ですが、300ページある論文でも最初の一行で決まります。全部の中身を圧縮し一行で、ものの本質をグサッと書くのがいい論文なんです。この映画は、それがある。あの冒頭シーンに、これまでの本学の歴史、創立者たちの生きざまが全部投影されていると思います。

### 次の時代、次の世代に伝えたいもの、残したいもの。

**編集部■**最後に、この映画を見たくなるようなメッセージ、座談会の感想などをお願いします。

**近衛はな●**今日は貴重なお話を、うかがわせていただきました。学生時代につくる友達って生涯の友達で、ここから先はそんな友達は、たぶんできないんじゃないか。そんなことを考えながら、皆さんのお話をうかがっていました。

**編集部■**きょう、ここ生田キャンパスは「ホームカミングデー」です。会場では何十年ぶりかに再会して、「やあやあ」とか、「おー、元気か」と交流をされている方もいると思います。そういうときに、こうした座談会を開催できたのも、いいタイミングだったと思います。

**日高理事長・学長●**私も同級生に、卒業して40年ぶりに会いました（笑）。

**神山監督●**一番見てもらいたいのは若い人たちだと先ほど言いましたが、僕はいまの若い人に全然絶望してないんですよ。むしろ若い人たちが持ってる夢、情熱を汲み上げる社会になっていないことが気がかりですね。

**菅沼育友会長●**私は2009年６月から、育友会の会長をやっています。「すべては子どもたちの未来のために」というのが活動のスローガンです。この映画のサブタイトルは、「そのとき若者たちは未来を見た」。通じるものがあると勝手に思っています。

**甘竹校友会長●**私は簡単に（笑）。この映画を見て、特に若者に意欲と行動力を持ってもらいたいと思います。

**日高理事長・学長●**この映画は最後に、何のために学問をするのかを問いかけています。ですから、まず学生に見てほしい。それと卒業後、人生のスパンの中で10年後、20年後、30年後、繰り返し繰り返し見る映画だと思います。そういう意味では古典の雰囲気があります。古典は何回読んでも、読む時代、経験、年代によって引き出すものが違います。そういう映画になると思いますし、そのようにつくっていただいた関係者に感謝します。

**編集部■**この『アドニス』が校友のお手元に届く頃は、スバル座での上映も迫っていると思います。ぜひ、お誘い合わせの上ご鑑賞ください。座談会にご出席の皆さん、長時間、ありがとうございました。

（11月6日、生田キャンパス理事長室にて「ホームカミングデー」の日に）

相馬永胤　三浦貴大

時代の熱気や、相馬の情熱を大切に演じました。相馬は言葉で「俺について来い」と言う人ではなく、実直に勉学し、目標に向かって真っすぐ進んでいく姿が、周りの人を惹き付けたのだと思います。僕自身も相馬を演じて、力をもらいました。映画を観た人にも、それを感じ取って、パワーをもらって帰っていただければ嬉しいです。

田尻稲次郎　池上リョヲマ

幕末を扱った映画は多いですけど、これはそれ以降、刀を外して、背広に着替えていった志士たちがどう考え行動していったかということを描いています。駒井が田尻とのいさかいの後、田尻に上着を貸すシーンがあります。もとは政敵同士が、それを超えて国をつくったということを象徴していて、創立者の凄みが感じられると思います。

目賀田種太郎　橋本一郎

日本の転換期において、日本を世界に通じる国にしようと勉学に励んだ話です。時代感を出すために、会話のテンポや所作に気をつけました。幕臣出身の目賀田は、気持ちの大きな人物で、人当たりが良かったのではと解釈して演じました。お気に入りは、仲間に嫁を紹介するシーンです。人間臭い部分を可愛く出せたかなと思っています。

駒井重格　柄本時生

大学をつくった偉大な人物ということもあって、言葉遣いや歩き方なども気をつけました。駒井に関する資料は沢山読みましたが、駒井はこういう人物と決め付けるのではなく、セリフを何度も何度も繰り返し声に出し、体に入れて、あとは意識せずにまっさらな気持ちで現場に向かいました。僕なりの駒井像を演じられたと思います。



撮影（P2～5）／久保政喜　「育友」編集部